

\* 感想 \*

M.T.

指は指差せない、から始まる紹介文、

見えない経験、組織されない身体、とのタイトルに魅かれ、観に行っただ。

大宮は京都を終点とする中山道が通っていた、という町らしい。

さいたま国際芸術祭というのは今回は大宮が中心らしく、少しぶらぶらしたり、運良く展示も見ることができた。

旧大宮図書館、というところで、主に三階でパフォーマンスが行われたわけだが、すでに使われていない図書館は、床は剥げつつある、昭和 50 年代の雰囲気を残していて、アーカイブ、あるいは社会主義的？官僚制を感じさせる書庫跡があり、その傷や痕跡が刻まれうる物理性は今やインターネット、web あるいはクラウドにとってかわられようとしていることにもパフォーマンスによって思いを馳せることになった。

そんな場所で、見えない経験と、組織されない身体を共有あるいは理解すべく、準備を重ねてきたというパフォーマンス者たち。

コロナで延期されていた。本来は 3 月頃の開催予定だったという。

僕も前から、このタイトルなどを見ていたから、なんとなく想像し、身構えていたところもあったかもしれない。観客に過ぎないのにタイトルの魅力に若干緊張さえしていた、と言ってもいいくらいかもしれない。

1 日目。

たくみちゃんさんのパフォーマンス。

地面、床の凹凸を、触感から全身でフロッターージュして痕跡を残しつつ、舞踏していた。

分断のない世界をつくりたい、と言う。

まる、は個か、心か。両手と円を描く身体のリズムは見るものにも振動してくる。

両の手、二つの円、下半身は描けないから、下部ではつながっているのは、人と人の間でつながっているのだろうか。人にはオーラがあるとされるが、両の手で描く円くらいの大きさがそれなのだろうか。境、境界が円、広げる努力で、太く重なりゆく線、逆説的だけど、明確な境界があつてこそ、なのだろうか、人と人は。

2 日目。

やはり、隠れたテーマはやはりコロナ下の身体。

皮膚にも聞こえる、消毒しましょう、とのアナウンス。

ケージの中にいるように、外出の自粛が行われた。それはすでに知らぬうちにわたしたちに身体化されているのだろう。

怒りはまさか見えないコロナ自体にぶつけても暖簾に腕押しみたいなもので、行き場がないから、反復し、持続す

るほかない。

ここで、僕にとって応えたのは音、反復する音。先に緊張したと言ってもいいくらい、と書いたが、音にビクビクしている自分に気づいた。そして、それは同じ場を動かずに滑り行くことや、何かの準備のために地ならしすること、あるいは脈拍の拍動でもあり、他者の呼吸や脈動を聞くことでもあったらしい。

後者の他者の心拍音がメトロノームにより可聴化され、7人のそれが集められた。そのバラバラな脈動は、カオスなのかもしれないが、ある人の説によると、組織され得ない7つのメトロノームの心拍音は、それぞれ自律的に鳴るように聞こえても、ある周期で一致するのだとか。数学的にはそうなのかもしれない。

一つの場合での反復行動。それは、水平に窓の外に広がる世界に出ていこうと足を動かしたり、手を伸ばそうとしたり、さらに壁やガラスを押ししたりしても、広げることがかなわず、ただ反復を迫られる。垂直方向、青空あるいは星空が広がる上方に向かおうとしても低い天井にぶつかり跳ね返るだけだったりして、この箱の中ではイメージーションを拵げようとしても、自分に返って来るほかない。そんな世界に私たちはいるのか。

仕方なく音という空間に耳目を集中させる。

あるいは、いわば下方へ、床へ、いわば叩きつけるように己をぶつける、または沈める(鎮・静める)しかない、のかもしれない。やり場のなさ。音も重力により沈潜しゆく。

デュレーション・パフォーマンスというらしい。一定の長さ、時間、パフォーマンスし続ける。自然反復・回帰が発生するものらしい。

duration とは持続のことだそうだ。反復というのはある一点から動かないこと、動いても元のところに戻ることに指摘があった。

また、床もあるから物理的には掘り下げられない。そうした中で自由に活動する存在とは、可能性とは果たしてなんなのだろうか。

あるいは床や地面、地層の痕跡からマグマのように噴き出て来る何物かであろうか。すると、聖地、サンクチュアリを聖定するかのように線を引き画地し、地をなでるようにならし、なだめる必要があるのかもしれない。

コロナというウイルスは現代文明とどのような関係があるのだろうか。土がない、タネさえ植えることもままならない都市文明に生きること。コンクリートや鉄などの箱の中にくらす私たちとコロナの関係とは？

それでも、社会的な動物たる人間である限り、最小単位の個と個は感応し合うものだと思う。たとえ引きこもって一人になろうとも、今は壁を越えて容易にアノニマスな何かが孤独者に入り込む。固有名を持ってない、というやるせなさ。

そう簡単に己の体験を経験とすることもできない。おそらく経験化するには他者が必要だから。

そんな中で、皆の呼吸と脈動に意識を向け、

意識が混ざり合わせ、場を作る、というよりもむしろ、出来事を皆で作る、というところみを目指されていた。それは長いようであつという間の体験でした。